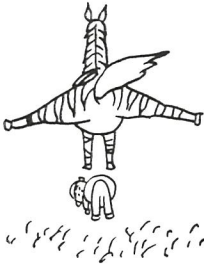


# 透 明 人 間

—新 童 話 考—



今 江 祥 智

△わたしたちは、いま、曲り角に突っ立っているような気がする。曲り角。ターニングポイント。クノートン・プンクト。佐多稲子風というならば、そこをまがって、つきあたって、それから、わたしたちは、一気に飛躍しなければならぬのである。▽

—花田清輝「思い出」—

## 一、匿名の文学

読者が名前にたぶらかされないように、小説やエッセイには匿名が必要であり、署名しなければならぬのは、むしろ、匿名欄や三面記事のほうではないかと、皮肉と自信をまじえた調子で書いたのは、E・M・フォスターだったと思いますが、そんなお説の有無にかかわらず、児童文学は、もともと匿名の文学ではないでしょうか。

読者が大人なればこそ、虚栄心、気どり、

固定観念、世評、批評家先生のおしゃべりなどというやっかいな代物にまどわされ、ひきまわされて、作者の名前に気づき、ついでに、本の題名から流行の具合まで気にするというようなは、めにおちいるわけですが、読者が子どもである児童文学の場合、そんな心配は一切不要です。

子どもたちは作者の名前などてんで気にとめませんし、ましてや、それ以外のことにたぶらかされることはない。それに、もしも、退屈な、あるいはお説教がいつばいの本を与えられたときには、独得の武器を使って、対抗します。つまり、「とばし読み」「ななめ読み」にした上で、すましてその本を大人たちに返すのですからかたじけません。そして、そんな場合、子どもたちの頭の中には、作者の名前は勿論、本の中味さえもきれいさっぱり消え失せていることは、いうまでもありません。

尤も、例外がないわけではない。例えば、ドイツのエーリヒ・ケストナーなどは、それこそ八才から八十才までの子どもから大人までが、ケストナーというサインに安心して彼の本を読みます。そして、ケストナーは

決して期待を裏切りませんから、たいしたものだといわなければなりません。おまけに、少年時代に「エミールと少年探偵たち」を読んだ読者が、長じて「ベルリン日記」を読んでも、おそらく同じ感銘を受けるといったことは、やはり、ナチスドイツに抵抗しつつ、あくまでもドイツにとどまったというど根性の作家にして初めてできたことでしょう。

この点、日本の児童文学の書き手たちには、いささかがつかりしないわけにはいきませんでした。

そのことに気がついたのは残念ながら、ぼくが大人になり、中学校の先生になってからのことでした。

ぼくが子どもだった頃とちがって、近頃の学校図書室はなかなか充実したもので、子どもの本は書棚にあふれ、子どもたちもまた部屋にあふれていました。(尤もこのほうは、子どもの絶対数に対して部屋の面積がせますぎることからきたわけですが)

子どもたちは、飢えたウサギのように、猛烈ないきおいで本を読みあさり読みとばし、さあ先生、何かいい本なあい？とつめよります。じゃあ、これはどうかな、こいつはいい

ぞ……。とやっているうちに、こちらの手持ちはみるみる品不足をきたし、そこでぼくは、多少いまいましいことながら、かの講談社の絵本の宣伝文句、*「面白くてためになる」*本はないかいなど、つぶやかないわけにはいきませんでした。とくに国産の児童文学の貧弱さには、悲しくさえなつたくらいです。

そんなわけで、偶然、地方新聞から、何か読物を書くようにいわれたとき、まず子どもの読物と考へたのも、いわば当然のことなものでした。

## 二、透明人間

そこでぼくは、これまでの日本の児童文学の目ぼしいところを、読み返し読み漁り、あらためて宮沢賢治に脱帽し、新美南吉に感心しましたが、さて、何が一ばん不足なのかと考へて、そいつはユーモア、あるいはフアルスの精神だと気がつきました。

日本の児童文学の世界には、やたらと悲しいお話や思ひ出ばなしいの多いです。あるいは、もう悪戯のできなくなった大人たちが、悪戯の仲好しである子どもが羨しくてしかたなくてこしらえた、*「教育的配慮」*満点の読物

が多いのです。

あんまり悲しまないで下さい。いや、あんまり悪しませないで下さいという気もちが、ぼくの出発でした。

善はいそげ。ぼくは、日本の大人たちの一ばん得意な科目——ユーモアのたっぷり入ったやつを、戦後の子どもの呼吸とびつたりと合つた、ドライでテンポの早い文体で書いてやろうと思ひました。

倅い、この連載はその後一本にまとめられました(「山のむこうは青い海だった」理論社、一九六〇)ので、でき上りについては、そいつをごらんになつて載く他はありませんが、反響は直接、読者である子どもと大人とから、相半ばしてぼくの手許に届けられ、もともと、子どもがよんで面白く、大人が読んだら一層よく分るたちの作品を意図しただけに、ぼくを喜ばせました。大人からののはともかくとして、子どもからの直接手紙による批評的感想文には、なかなか面白いものがあり、ぼくは自分が子どもだった頃にはできなかった、こんなことをやってのける子どもたちに、敬礼しました。

そこへゆくと、大人の、それも児童文学畑

の人たちは、今ごろになって、再評価して下さる始末で、なるほど大変面白いことだと思いました。

尤も、昨秋、同志社大学の鶴見俊輔さんが、この本を宗教学のテキストとして使われたと聞いたときは驚いてしまいました。同時に使ったテキストに、よく自身愛読したサン・テグジュペリの「星の王子さま」や、花田清輝の「鳥獣戯話」があったと聞いて、こんどはいささかテレ奥さかったので、鶴見さんには、おかげさまで大層出世しまして……とだけ申しあげたことでした。

まあ、そんなことはどうでもいいのですが、この物語を書いたとき、ぼくは、決して思い出話はするまい、自分の分身なんかをうろろろさせまいと考えていました。／＼涙をためてふりかえる／＼のなるともかく、／＼涙をためてふりかえる／＼のようなことは、書き手以外には無意味です。

ところが、読んだ人の中に、おい、こいつはお前やろ、とモデル考を下さつた方がいたので、ぼくはすっかりあわててしまい、しくじった透明人間のような気もちになってしまいました。

たとえば、自分自身がうろろしていたり、分身がちよろちよろしても、そんなやつをじつと見つめているもう一人のぼくが、ちょうど透明人間のようにいなければならないとぼくは考えています。

それがいないと、どうしても思い出川が溢れ、おそれがあるからです。

この点、ぼくの透明人間ぶりは、あわれ、歌舞伎のクロンボ程度にすぎなかったようです。見えていても、いないつもりにならなければならぬというのでは、少々心細い。

そこで、次の機会には、そこそ透明人間でいるためにファルスのなやつを書いてやろうと思いました。

それが、一ばん新しい作品集「わらいねこ」(理論社刊・一九六四)です。

### 三、わらいねこ

この本の表紙には、でっかい赤猫がニヤニヤ笑っているやつが印刷されていますが、お話の中には、ネコは一匹もできません。いや、正確には小さなやつが一匹、それも犬に追いかけて登場はしますが、物語の本筋には関係がない。関係があるのは、勿論、わ

らいねこ、つまり、あの「不しぎの国のアリス」に出てくるでっかいやつで、口は耳まで裂け、歯をむきだしてニヤニヤ笑っているねこ。しっぽのほうから少しずつ消えてゆき、やがて顔だけになり、口だけになり、おしまいは「ねこなしのニヤニヤわらい」だけのこして消えてしまうねこです。

ところが、こいつも主人公ではなくて、主人公たちは、とのさまにはじまって、若さま、姫さま、おきむらいから浪人、やくざ、なぐれもの……といったちゃんまげ族。これが物語の中を右往左往するわけですが、この連中は、ねこのしっぽのように消えてしまいます。そして、どこかでだれかの笑っている声が合唱のようにきこえるでしょう——というしかけになっていますから、ちよつとこりすぎたきらいがないでもありません。少くとも、ファルスの精神で書いたものとしては。

そこで思い起すのは、狂言ののつとて、痛快なお芝居「ものみな歌でおわる」を書いた花田清輝と、同じく狂言ののつとて新しい型の活動写真「ああ爆弾」を撮っている岡本喜八の行き方です。

そういえて、ぼくの「わらいねこ」のテー

マは、次の歌に集約されているようです――

出雲の殿さま

柑子が好きで

宵に九つ

朝また七つ

一つのこして

袂にいでて

馬にのるとで

ころりと落し

取るにやとられず

捨てるにや惜しし

そこで家来衆

皆眼をつぶる

家来衆だけなら

盲にもなろうが

屋根の鳥が見てござる

（花田清輝「ものみな歌でおわる」）

「山のむこうは青い海だった」に副主人公役を演じるチンピラ諸君たちの動き方は、岡本監督の喜劇「大学の山賊たち」のチンピラ諸君に何とよく似ていたことでしょう。

このすぐれた二人の先達に導かれて、ぼくは次の仕事にかかろうと思っっています。が、その際、匿名の文学の精神からくる実質主義と、

透明人間の存在を忘れないようにしなくては思っています。

昔、ぼくが先生だったころ、ある新進の児童文学者に会ったとき、彼はちよつと苦笑しながらこういいました。

――ぼくは近頃大人のSFを書いてるんですよ。子どもの話ばかり書いてると、何だかいつも哺乳瓶をもって歩いているようでテレくさくつてね。

何というもつたないことをいう男でしょう。

大人のSFを書くのは勝手ですが、本物の子どもの本を書くためには、それこそ本物の哺乳瓶でももって歩くくらいの根性がいるほどのな。

大人を説得するには、一枚の舌か、せいぜい二枚の舌があれば足りませんが、子どもを説得するには、そんなものでは役にたちません。「星の王子さま」の作者は、みごとにそれを見つけたのですが、この作品は、子どもの文学としては勿論、大人の文学としても、第一級の作品でした。

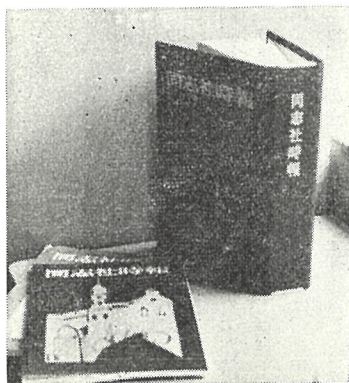
（昭二九大英卒・童話作家）

## 同志社時報合本用ファイル

時報をいつまでも保存するために、コメント合本ファイルをぜひ、お備え下さい。十二冊入り。ご入用の方は左記へお申し込み下さい。（〒）とも一三〇円

京都市上京区烏丸今出川東入ル

同志社時報編集部



# 近江兄弟社の意味するもの

—その創立精神—



吉 田 希 夫

ウィリアム・メレル・ヴォーリズ

同志社の校歌「ワン パーバスク」の作詩者であります、ウィリアム・メレル・ヴォーリズによって創始された近江兄弟社は、今年二月二日に、創立五十九周年を迎えることになりました。ヴォーリズは近江商人の発祥地、近江八幡にあります県立滋賀商業学校の英語教師として、米国から明治三十八年に来朝し、英語会話を教授する傍ら、自宅を開放して、聖書研究会や基督教運動を展開しました。そのため、父兄や在校生、地方当局者間に非常なセンセーションを起こし、わずか二年間の奉職の後、ついに免職処分となりました。しかし、この地こそ、神が伴い給うたところ、使命のあるところと信じ、あえて信仰の冒険を始めました。

幸いヴォーリズは、米国のカレッジで、余技として建築設計技術を修めていたので、そ

れによって身を立て、一方、近江の各地に基督教福音宣伝を開始しました。これが今日の近江兄弟社の前身、近江ミッションでありま  
す。そして自給独立の伝道を目標に、ヴォー  
リズ建築事務所が設立され、やがて「世界の  
家庭薬」として知られたメンソレータムの販  
売権を得て、近江セールズ株式会社が設立さ  
れました。それは大正九年のことでありま  
す。右手に産業、左手に福音伝道事業と、平  
信徒の特異な団体として成長してまいりまし  
た。今日では、近江兄弟社は三つの法人から  
なり、全員で五百人近い団体となりました。  
それはつぎのようになっております。

① 財団法人 近江兄弟社

A 近江サナトリウム

病床 二百十五

基準看護

基準給食

基準寝具

B 近江兄弟社図書館

蔵書 約五万冊

一般公開

児童図書館

C 近江八幡YMCA

英語教室

タイプライター教室

音楽教室

体育教室

D 宣教事業

湖畔周辺の伝道地応援

② 学校法人 近江兄弟学園

A 清友園幼稚園

B 小学校

C 中学校

D 高等学校

③ 株式会社 近江兄弟社

資本金 九千六百万円

従業員 二百五十二名

商品

メンソレータム

ラブ

パイタム

エアーウィック

ハモンド・オルガン輸入

ここにおいて、株式会社近江兄弟社は、財  
団法人の台所のような役割をしているわけ  
であります。

理想の郷土

近江兄弟社員は、どの法人に属していても  
それぞれの部門で、その事業の使命を遂行す  
る責任の一端をになっているのであります。  
三つの部門は、いずれも使命の異なるもので  
ありますが、全体としての高い目標はキリス  
トの福音宣伝、神の国、理想の郷土、ユート  
ピアを祈り求むるものであります。

社員は基督者ばかりで、教会に属します  
が、一教派にとらわれることはありません。  
近江兄弟社自身は、どの教派にも属しないの  
であります。今日、近江兄弟社のどの部門に  
おいても、朝礼拝が全員によって守られ、ま  
た創立者の悲願であった禁酒、禁煙も、厳と  
して社員の総意により守られておりますこと  
は、われながら驚く次第であります。今の時  
代、禁酒、禁煙という小さなことはどうでも  
よいことかも知れません。しかし、先年エミ  
ール・ブルンナー博士が言われたように、か  
かる小さなことが守られているが故に、この  
団体の団結は、外部の人々から、はかり知れ  
ぬほどに強硬なのであると思えます。

近江兄弟社は、その名の如く大家族におけ



W.M. ヴォーリズ氏

る兄弟姉妹のような温かい交り、家族的なものをもっております。近江兄弟社は不便な土地にあって、時勢に遅れているかのように見えます。確かに地理的理由から見ますと、この団体は刺激が乏しく、全体としてのんびりしているようであります。しかし、それは一面に家族的な交りが、そう感じさせることも多々あると思います。

近江兄弟社は大企業の如く、大きく発展することは望みません。むしろ、質において、内容において、常にベストでありたいと念願しております。この団体はそれぞれ特別な使命と責任をもつ故に、大企業の如くなつて、その特異な面を失いたくないからであります。近江兄弟社は一つの小さなユートピア運動のように、この激しい世の中であつて、何

かをデモンストレーションするものでありたいと願っております。世間の目からみると、弱く、甘いクリスチャンでも、打つて一丸となれば、何ができるかを世に示し得るものでありたいと思います。酒と切れない交友関係、宴会にあけくれの多い取引に、禁酒の交りは、ロータリーのその如く、常に明朗で、そして能率的であります。そこには、創立以来六十年近く、トラブルもなくして発展してきた秘密があるのかも知れません。

近江兄弟社は数年前まで、従業員の平均年齢も高く、老化現象を示しておりました。しかし、全社員の話合いと理解の上に立つて、若がえりがスムーズに行なわれ、今、再びこの団体はすっかり若くなりました。そしてつぎに新しい夢が生まれてきております。私達はここで近江兄弟社の信仰が、もう一度福音の本義にかえることを願います。毎月開かれる全社員懇談会でも若い声が出ております。兄弟社に属すれば、一人一人がその構成員であり、社を支える大切な柱と感ずるところ、この団体にある生き甲斐でありましょう。また、そうあり得るように指導するのが先輩でなければなりません。

#### 同志社と近江八幡

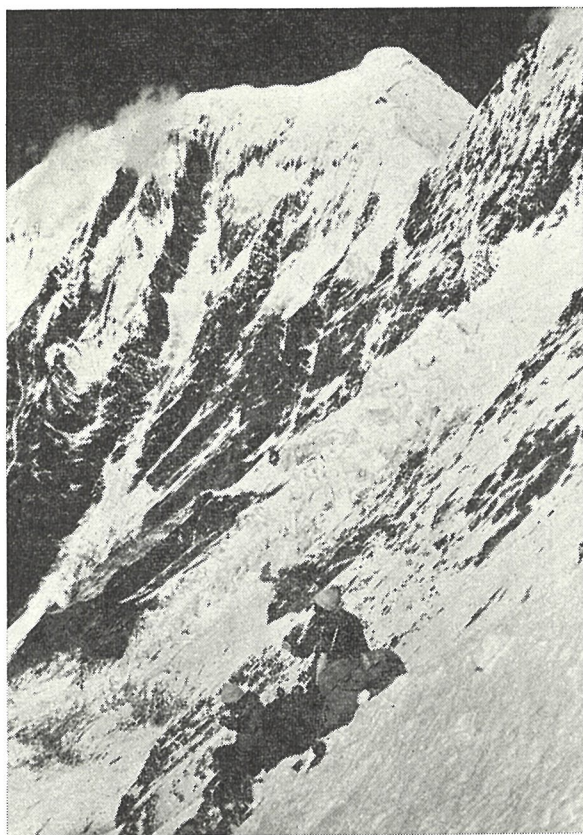
同志社の校祖、新島襄先生のことばの如く良心を手腕に運用する勇士こそ、今日この世において最も要求されることであります。同志社で学んだ兄弟姉妹、三十数名も今、この近江兄弟社で働いております。ここにその勇士が、更に生まれることを切望するものであります。

また、近江の八日市に初めてキリスト教が伝わったのは、新島襄先生が自ら伝道して下さったからで、それは明治十年頃でありました。そして明治十二年に八日市基督教教会が設立され、その時初めて近江八幡にキリスト教が伝わりました。その後、同志社の宮川経輝先生、原田助先生、ギョリック先生、堀貞一先生、ラルネデ先生らも、近江八幡に伝道に来て下さいました。その結果、近江八幡基督教講義所が設立され、明治三十四年に近江八幡基督教教会が設立されました。ヴォーリズは来朝以来近江八幡基督教教会のオルガニストとし、長老とし、また教父として奉仕しました。このように、同志社と近江八幡教会と近江兄弟社とは深い関係があります。

(校友・昭一五大政・近江兄弟社長)

# サイパルへの道

児島勘次



インド領、タナカプールからの苦勞の多かつたキャラバンは八月三十一日に始つた。一行は全隊員六名とコックのラクパツェリンドで、数名のポーターはその土地、土地で傭つた。本隊は十三日目にバジヤン地区のチャインプールに入つた。荷物隊はピトラガール(インド領)に残した私達の荷物を持つてカリ河を渡つてネパールに入つた。リエゾン・オフィサー(連絡将校)のケーシー氏とサード(頭)シエルパのパスンプタール三号の責任のもとに荷物は、約七十数名のクーリーの肩にかつがれて、尾根通しの道をチャインプールに向つていた。本隊がクーリーに苦しんだと同様、パスンも人夫を一時に集めることができず、第一隊が八日にケーシー氏とベンバテンジンの指揮でチャインプール入りをしたにもかかわらず、第二隊、カミパスン指揮の荷物は我々がチャインプールに集結したときにはまだ着いていなかったし、最後の隊をまとめて来るはずのパスンもいつつか判らなかつた。我々と行を共にしたコックのラクパは、食糧のやりくりに苦しんでいた。荷物といえは、わずかにテント二張と一週間分の現地食をもつて、バンバサ、ブリッジを渡つて

ネパールのタライ地方に入り、ジャングルと水田の入りまじったひどい道を約二日間、それからシユバリツク・ヒルを越えて、山また山の……山蛭やダニやブトなどに日夜悩まされながらの苦しい旅をつづけて、命からがらといったいいようなひどいキャラバンを続け、シリガリ・ドウテイ対岸の峠（高度約四千メートル）を越えて、はるかにネパール西部のアビ、サイバル、ナンパの山群を眺めたときは、もはや秋風が吹いていた。苦しかったヘビー・モンズーンがやっと過ぎさって、大らかなすみ透った秋空のもとに我々はキャラバンを続けることが出来た。セチ川の大きな流れを越えて我々は、はるか山の中腹に村落を見とめた。それがこの地方の中心地のシリガリ・ドウテイであった。三針葉あるいは五針葉の長い葉をもった赤松の疎林を越えて行くマラケティ街道からモンズーン後、最初の隊商が沢山の馬をつないで大きなキャラバンのテントを張っていた。モンズーンが過ぎると荒れた道をおすために、村人が勤勞奉仕のような恰好で、プリイミティブな鎌や木で造った道なおしの道具を持って多く出ていた。土地のやわらかな所は十ないし十

五メートルの道幅にきり開いて道をならし、よい道になっているが、少し岩があると、彼らはどうすることも出来ず、そこではわずかに人や馬が通れるだけのあわれな道づくりしか出来ない。道路改修が中央政府なり、その地方のポリスとかムキヤと呼ばれる村長の指揮によって、強制的に行なわれているのかどうかは、通りすがりの我々にはわからなかったけれども、村人の老若男女がみな道作りに出ているということは涙ぐましいような情景であった。

ネパールは山の国だ、山と谷を除いて何があるうか、谷も壮年期のきりたった深い谷で村人はわずかに山の中腹の緩傾斜のところに段々畑を作っている。この辺の土地は急斜面のため水田を作っても水の引けるところはわずかなものであるから我々の見たものは、ひえ、とうもろこし、麻、それに、ときどき美しく彩どりをそえている鶏頭が咲きほこっていた。鶏頭の実から油でも絞るのかと思っていたがその実を食べるのだそうだ。牛や羊がその狭まくなったり広くなったりする街道を悠々と通る。セチ川の流れを下に見てシリガリ・ドウテイのかなたに目ざすサイバル山

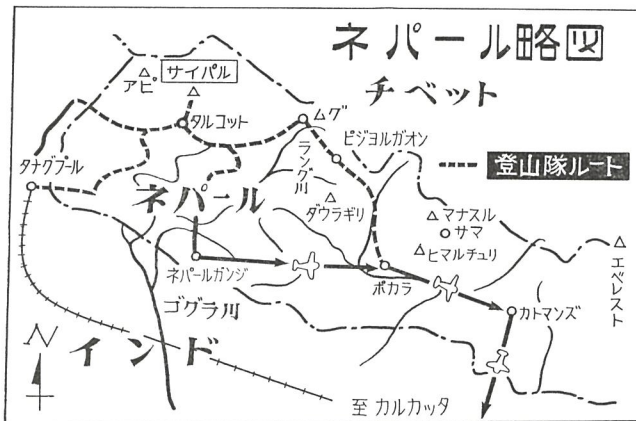
群が見えるはずであったが、この秋晴れのさわやかなポスト・モンズーンの時期になってもサイバルのあるあたりには、ただ積乱雲がたむろしていてなかなか姿を見ることは出来なかった。シリガリ・ドウテイへのセティの下りは随分長い下り道で、九月六日午後一時頃に三千八百メートルに近い峠を越えて約一時間下ったところに茶店があった。そこに泊らないとそれから先は、部落もなく水もないと人夫たちは言つて、ここに泊りたい口ぶりであった。茶店に二時頃ついて、ネパールでは珍らしい砂糖入りの紅茶を飲んだ。もう一息（約二時間）歩いて今日のキャンピング・サイトを作るといふ平林君の提案に従つて、我々は人夫がまだ茶店に着かない前に出発、行けどもいけども下りの道は長く、午後五時頃やっとヒンズー寺院のある部落に着き、そこで泊まることにして人夫を待った。岡田、佐藤の両隊員が人夫の監督をして早く歩くようにとせきたてているはずだが、なかなか着かない。六時半頃やっと先発のクーリーが着いて、寺の横の菩提樹の下にキチン用のフライテントを張つて福田君やラクパなどはるか下の村落に食料を求めに走つたが、村民はな

じみない旅人には食糧を出し渋り、やっとチキン二羽、かぼちゃ、きゅうりの大きく買ったもの（いわゆる日本でいうサンキュウ）一本の買出しに成功、真暗な道をヘッドランプをたよりに帰って来た。隊員のテントはフライテントから少しはなれた尾根の平らなところに張って、夜は美しい秋空の星をながめながら、星座のことなどを語りあった。

翌日も引き続き下り道を約三時間やっとセティ川にかかる唯一の鉄橋の袂についたときは、私の疲労は相当なもので、小便をするとき真赤な色をしていたのに我ながらハッとした。が他の隊員にいうのもどうかと思ってそのまま歩きつづけた。ちょうど昼頃なので紅茶を飲み、ジャガイモの揚げたのを食べて約四十分間休憩、それから暑い日ざしの中を下ウティへの登りにかかった。私が最も疲労困ぱいしたのはこの暑いシリガリ。ドウティの登りの道であった。登り道の所々にわれわれが「風をよぶ木」と呼んでいる菩提樹があり、その下にスレートを四角に積んだ恰好な休み場所があった。隊員たちはまだ元気でどんどん先へ進んだが、私ひとりだけを残していくのもどうかと思ったのか、岡田君が私に附添

い、休み休みその道を登ったのである。午後五時頃、我々はやっと急な道を越してシリガリドウティの町の入口に立つことが出来た。そのときの私の恰好は下はパンツ一つに、上は半袖のキャラバンズといういでたちであった。疲れた私はとある茶店の赤くぬられたスレートにこしをかけ一服した。シリガリ。ドウティの町は非常に美しい町で、広場には美しくきれいに飾られた店舗が並び、いわゆる街道筋の町であるが、水道が道路の真中にひかれて所々に給水する所があり、水道の蛇口から誰れでも水を汲めるようになっていた。

インドでもネパールでも、町には水牛、牛などのふんが致る所にあり、その臭いと汚さに我々はまゆをひそめたものだが、町の中をのさばって歩く水牛、牛もいず、わずかにやぎが店の先につながれているくらいで、今まで田舎ばかり歩いてきた我々の目には、大変清潔にみえた。また美しい女性たちが、かろやかな色彩豊かな服装で店先にいたり、石だたみの道を歩いており、それを見るのは心楽しいもので、まるで龍宮城に來たような感じであった。私の休憩が余り長いので岡田君



は先に行き、ひとりになった私は町の広場にある一軒の店先に座った。すると附近の子供や村民がもの珍らしそうに私の周囲に集って来た。疲れてはいても、「ナマスカル」（こんにちはという意味）と笑い顔を作って大い

に外交ぶりを發揮しているところえ、松村君が半ズボンを持って迎えに来てくれた。やつと人心地を回復した私はそこで服装をとのえて、また街を進んだ。この町全体が坂道に沿って建てられているので、次々に違った風景が現われる。やがて大きなヒンズー教の寺のある広場に出た。先着の隊員達は練瓦塀で囲われた塔の横にテントを張っていた。

ここでクーリーを全部新しく変えたので翌日の出発は十時すぎとなった。雨雲のたれこめた山道を進むうち午後にはとうとう激しい雨となり、峠の急な下り坂の石ころ道を大急ぎで進んだ。谷水は俄かに増えゴーゴーと赤茶けた激流が、谷すじの岩をかねで流れ落ちている上に、細い一本橋がかっている。平林君が先頭になって渡り、ロープを張ろうかと相談したが、時間がかかるので取やめ、私もこわごわ渡り終った。私のあとに続いた美しい娘をつれたネパールの老人もさすがに山国の人で、誰の助けも借らずにその丸太橋を渡った。道はまた山腹を縫って延々と続く。相当急だが、つるべ落しの秋の日は逐々暮れて、その日の泊場となった部落のテント場に着的いたときは真暗であった。翌日は良く晴れ

た秋空の下を横巻きに峠を越え、セチ川の支流に出た。そこで魚釣りや洗濯をしたのち、再び北行して山腹の部落の上方に野営した。そこから東の谷に大きな瀧が見え、その上にシリガリ ドーテーからパジャン地区に出る本街道があるらしい。ここは見晴しの良い所で、私達の道は近道であるらしい。一人の日本の植物学者がこの附近に採集旅行をつづけていると聞く。

翌日峠を越えると、大きく彎曲したセチ河の上流に再び出て、久しく待望し、渴望していた私達の荷物と会える。日本のピースがふんだんに吸えると思うと心もはずむ。

翌十一日大急ぎで秋空高い峠に出たが、半時間ほど前に先発した平林隊員のみがアビ山群に挨拶をかわした。だが我々の前に遂にサイパルの上の雲は晴れなかった。まだみぬ処女峯に向って、タライの底から這い上って以来約十二日、ロハガットの幽囚の日、峠からナングバルバットの雄姿を遠望し得たときも、アビの断崖は見えたが、サイパルは雲のベールをぬがなかった。あこがれの山サイパルが私達の前に麗姿を現わすのは、いつのことなのであろうか。

(校友・サイバル登山隊長)

## 新島研究会

### 第四回 懸賞論文発表

二月三日開催の懸賞論文審査委員会にて次のとおり本年度の受賞者が決定した。

題目「民主主義の発展と新島襄」

一等(二万円) 関口 徹(文学部二回生)

二等(一万円) 侯野真美(女子大、英四)

三等(五千円) 松山恵樹(香里高校三年)

佳作(三千円) 田原 剛(香里高校三年)

〃(〃) 吉田邦広(〃)

なお授賞式は二月十二日(水)午後開催の新島先生誕生記念講演会の直後これを行った。

新島研究会